



田んぼごとに違う世界

り、
て神
ん
若山



あえのこと 稲の生育と豊作を願う農耕儀礼。毎年12月に家の中に迎えた田の神様を農家の主人らが2月に田へ送り出す。国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産。2009年に石川県教委が実施したアンケート調査によると、奥能登2市2町で実施しているのは85軒だった。



雪は豊年満作の瑞兆という。今月9日、若松の枝に宿る夫婦の「田の神様」は、一面の雪に覆われた水田に導かれた。珠洲市若山町火宮の積雪は約1尺。株姿の団体職員田中茂好さん(66)がシャク、シャクと鍬を振るった。

「雪の年は害虫が少ないと聞いた。良い収穫を期待したい」。田中さんは、ほっとした表情を浮かべた。2010年に亡き父から「あえのこと」を受け継いだ。神様を水田に送るのに先立ち、まず食事を召し上がってもらい、次に風呂に案内し、いろいろに当たっていただく。もてなしの順序は父のころと変わらない。「先祖代々やってきたことをしっかりと受け継ぎたい」と話す。

あえのことは農家と小作人の間で

家の個性、保てるか

労働契約を交わす儀式だったという。民俗研究家の西山郷史さん(71)「珠洲市飯田町」の指摘だ。ゆえに日取りも、儀礼の順序も、神様の姿も異なる。「家の成立の問題で、田んぼごとに違う世界がある」と西山さんは話す。

実際、輪島市白米町、県職員川口喜仙さん(53)方の神様の場合は、まず風呂に案内され、それから食事。アテの枝に宿って田んぼに送られた。川口さんは言う。「画一化が心配です。他の家に儀礼を合わせようとしてしまうと、もったいない」

収穫に感謝し、豊作を祈る。神様へのもてなしに铸型はない。能登が「まれびと」を引きつける磁力は、伝統を受け継ぐ家の個性にある。

(宮下岳丈)